

NEWSLETTER No.127 TŌYŌ ONGAKU GAKKAI KAIHŌ
ISSN 1340-5578 The Society for Research in Asiatic Music May 25, 2026

一般社団法人 東洋音楽学会 会報 第127号

発行 一般社団法人東洋音楽学会
事務所 〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル307号 TEL/FAX 03-3832-5152
●E-mail : LEN03210@nifty.com ●ホームページ : http://tog.a.la9.jp

目次

第77回大会のご案内..... 1	選挙管理委員会からのお知らせ..... 10
第77回大会の研究発表募集..... 2	会費納入のお願いと大学院生会費割引のお知らせ..... 11
第3回定例研究会レポート..... 3	『東洋音楽研究』原稿募集のお知らせ..... 11
第4回定例研究会レポート..... 5	ICTMD (国際伝統音楽舞踊学会) に関するお知らせ..... 12
これからの定例研究会の予定..... 7	RILM (音楽文献目録) 委員会からのお知らせ..... 12
研究企画委員会からのお知らせ..... 8	小島美子先生を偲んで..... 13
第43回田邊尚雄賞授賞発表..... 8	会員異動..... 13
第44回田邊尚雄賞アンケートのお願い..... 8	図書・資料等の受贈..... 14
会員の受賞..... 9	新刊書籍..... 14
第28回通常理事会議決事項のお知らせ..... 9	新発売視聴覚資料..... 15
会員名簿掲載の「常任委員会規程」の訂正..... 9	編集後記..... 15
田邊賞基金および今後の学会賞についてのお知らせ..... 10	第26回通常理事会添付書類..... 16
情報委員会からのお知らせ..... 10	

第77回大会のご案内

一般社団法人東洋音楽学会は、令和8年度の研究発表大会および公開講演会を以下の通り開催します。多くの会員のご参加をお待ちしております。

◇日時 2026年11月7日(土)、8日(日)

◇会場 国立音楽大学

(〒190-8520 東京都立川市柏町5-5-1)

◇日程

[第1日] 11月7日(土)

於：6号館110スタジオ

12:30 プレ・トーク 前島美保(国立音楽大学)

13:30 開会挨拶

13:35~16:30 公開講演会・公演「多摩地域の歴史と芸能

一八王子車人形」(仮題)

講演：細田明宏(非会員、帝京大学)

解説：川崎瑞穂(愛知淑徳大学)

座談：細田明宏、川崎瑞穂、五代目西川古柳(非会員)、

鶴澤三寿々(太田暁子、東京音楽大学)ほか

公演：八王子車人形西川古柳座、浄瑠璃：竹本綾之助(非会員)、竹本越孝(非会員)、三味線：鶴澤三寿々ほか

16:40 第43回田邊尚雄賞授賞式

17:00 第15回定時社員総会

18:30 懇親会 於：7号館1階食堂

(時間は予定)

[第2日] 11月8日(日)

於：7号館2階および5号館1階

9:00~17:00 研究発表(個人、共同、映像)

(時間は予定)

◇参加費

参加費 正会員：4,000円、早割3,500円
正会員のうち大学院生(修士課程・博士課程・研究生在籍者)・学生会員：2,000円、早割1,500円
非会員(第2日のみ)：2,000円
懇親会費 正会員：4,500円(予定)
学生会員と正会員のうち大学院生：2,500円(予定)
弁当代(第2日) 1,000円(予定)

◇実行委員会

川崎瑞穂 鯨井正子 鈴木良枝 武田有里 配川美加
平間充子 伏木香織 前島美保(委員長) 横井雅子
早稲田みな子

第77回大会の研究発表募集

東洋音楽学会第77回大会における研究発表を下記の要領で募集します。今大会では統一テーマを設けておりません。会員の多彩な内容の発表を期待します。

◇発表形態

A 個人発表：口頭発表(発表20分+質疑応答10分)
B 共同発表：共同セッション、パネルディスカッション等(90分、質疑応答を含む)※
C 映像発表：30分以内の映像作品(著作権が発表者に属するもの、あるいは使用に当たって著作権者の許諾を得ているもの)
※その他の時間枠をご希望の方は、申し込み時にその旨をお書き添えください。共同研究を30分枠で発表する場合は、個人発表として申し込み、共同発表者名をお書きください。

◇申し込み方法

学会ウェブサイト「大会案内」の「東洋音楽学会第77回大会 大会発表申し込みフォーム」よりお申し込みください。

【大会発表申し込みフォーム】

<https://forms.gle/CBUnE1E4JcuisFWn8>

次の二次元バーコードよりアクセスできます。



要旨は Word ファイルと PDF ファイルを、それぞれフォームの該当する項目へアップロードしてください。フォーム回答には Google アカウントでのログインが必要です。

フォームを利用できない場合のみ、電子メールまたは郵送での申し込みを受け付けます。電子メールの件名や封筒の表に「東洋音楽学会第77回大会発表申し込み」とお書きください(メール、郵送の際は次の諸項目を明記のこと)。

- (1) 題目(発表形態を付記してください)
- (2) 要旨(発表形態AおよびCは800字程度、Bは1000字程度)
- (3) 氏名(共同の場合は代表者氏名と構成員氏名。発表者に非会員の方を含むことはできますが、代表者は会員に限ります。また、非会員の発表者も正式な大会申し込みが必要です。)
- (4) 連絡先(電子メールアドレス、住所、電話番号)
- (5) 使用希望機材
- (6) その他(Bの場合は希望する所要時間、Cの場合は映像記録媒体など)

東洋音楽学会第77回大会実行委員会

大会実行委員会メールアドレス：tog77taikai@gmail.com

〒190-8520 東京都立川市柏町5-5-1

国立音楽大学 前島研究室気付

東洋音楽学会第77回大会実行委員会

申込締切：2026年6月30日(火) 必着(厳守)

※発表申し込みを受領してから2~3日以内に、その旨を電子メールで通知いたします。発表申込後1週間を過ぎても受領通知がない場合は、至急、上記の大会実行委員会までご連絡ください。

◇採否

申し込み締め切り後、大会実行委員会で審査を行った上で決定し、結果を電子メールで通知いたします。

◇備考

・本学会の大会発表では会報にレポートが掲載されます。そのため記録用の録音をとることをご了承ください。なお、会報レポート以外の用途での録音や撮影は発表者本人の許可を得てください。

・ご質問は、大会実行委員会メールアドレス(tog77taikai@gmail.com)までご連絡ください。

第3回定例研究会レポート

第3回定例研究会

西日本地区担当

大阪大学中之島芸術センターとの共催

日時：2026年2月21日(土) 14:00～

場所：大阪大学中之島芸術センター

シンポジウム「地域の芸能と映像—伝承領域としての映像を考える」

講演：牧田敬祐（ドキュメンタリー映画監督、非会員）

コメンテーター：出口実紀（大阪芸術大学）

進行：藪田郁（大阪大学中之島芸術センター）

要旨

今回の例会のプログラムは、大阪大学中之島芸術センターとの共催で開催されたシンポジウムである。「地域の芸能と映像—伝承領域としての映像を考える」と題された本シンポジウムは、日本各地に数多く存在する地域芸能の伝承現場において、それぞれの担い手が芸能にどう向き合っているのか、あるいはどう向き合っていくべきかを、昨今、芸能伝承の実践的な方法として用いられることの多い映像との関わりから考えるものであった。映像技術はこれまでも芸能の保存記録として用いられてきたが、技術的な変化に伴い、保存記録のためだけでなく、芸能の伝承そのものに関わるような状況も少なからず見出せる。そこには具体的にどういった課題があり、あるいはどういった可能性があるのかを、芸能伝承の現場に関わってきた映像作家と民俗芸能の研究者を招いて、映像と芸能の関係性の更新/拡張の試みについて考え、さらにその関係性を地域の人々と共有していく方法について、映像素材を手掛かりにした対話・意見交換が試みられた。

本シンポジウムでは、まず企画者（藪田郁）が上記の全体趣旨を述べたのち、映像作家である牧田敬祐氏による講演（「多様なツール映像を用いた民俗芸能継承の取り組み～記録・継承のツールボックスとして映像アーカイブシステム」）が行われた。牧田氏は、これまで近畿地方を中心に民俗芸能の映像記録事業に長年関わっており、講演では主にその活動成果として民俗芸能の二つの事例が紹介された。一つ目の事例である京都市久多の花笠踊りからは、対象とする芸能の映像が、一般的な作品、芸能の全体構成を記録した映像、そして芸能継承に関わる映像という、三つの視点から構成されていることが説明された。三つの映像は、それぞれ特徴をもっており、多様な形を持った映像民俗誌的なアーカイブとして成り立っている。映像データが担い手だけでなく芸能に関わる様々な立場の人（たとえば、全くの外部や近隣地域の人々）

でもアクセス出来るものとなっていることが示された。もう一つの事例では、滋賀県高島市朽木の六斎念仏の復活継承の取り組みが紹介された。この芸能に関する映像には、伝承の途絶えた六斎念仏踊りが自治体の呼びかけをきっかけに外部の担い手によって受け継がれ、さらに継承が再び朽木の人々に戻る様子が取められている。映像には、芸能の単なる復活記録だけではなく、伝承過程で起こる新たな担い手との様々な対話も含まれ、芸能に関わる全ての人々が伝承そのものに成り得ることが見て取れた。シンポジウム後半では、民俗芸能の調査に関わってきた出口実紀氏により、芸能伝承の現場において映像に関わる具体的な問題について、特に音楽的な側面に注目したコメントが示された。出口氏は、携帯電話の利用による演奏記録（特に練習用）が、従来のアーカイブ記録とは異なり、芸能と映像が個人単位で継承に関わっている点で新たな関係であることを指摘されたが、同時に、この関係が個人単位に留まっており、地域全体の芸能継承には繋がりにくいものであることも示された。

牧田氏の講演、出口氏のコメントをうけ、最後に座談形式により、芸能伝承の現場と映像の関わりについて、現在の課題と可能性が共有された。まず、これまでの映像記録の蓄積、さらにその整理が進みつつあるなかで、その膨大な映像をどのように個人と結びつけるか、という問題が確認された。その一方で、出口氏が指摘したように、映像自体が新たに個人単位で記録されることについて、芸能の伝承が個人から共同体へとどう広がっていくのかへの可能性についても意見交換が行われた。現在の伝承現場では、担い手が一度に集まれる機会が多くなく、個人での映像記録が継承として有用であることが指摘された（牧田）。個人の場合、（自分自身が関わる）演奏の断片が記録されることが多いが、これらの映像が、たとえば相互間で交換、共有されるような状況ができれば、個人の経験も共同体への継承へと繋がる可能性があるのでは、という提案も行われた（藪田）。牧田氏は講演の冒頭で、映像と芸能の関わりが新しい映像技術の登場とともに常に変化することで、映像作品が一部の限られた技術から、誰もが関わられる映像素材となったことを述べられたが、今回のシンポジウムでは、氏の指摘のとおり、具体的な事例を通じて芸能と映像の関わりの変化が確認できるものであった。実際に様々な映像の在り方を共有しつつ、それらを様々な個人、共同体のなかで共有し、繋いでいくような媒介的役割がどう構築されていくのか。本シンポジウムでは、今後向き合うべき問題の一端が具体的に示された。（藪田郁）

傍聴記

東洋音楽学会第3回定例研究例会の構成は、ドキュメンタリー映画監督の牧田敬祐氏による講演、出口実紀氏によるコ

メント、菌田郁氏による総括、という構成になっており、映像記録と地域の芸能の伝承や発展との関連を考える貴重な機会となった。

牧田氏による講演では地域の芸能と映像記録について現状と可能性が提示された。

まずは、映像技術の発展に沿って牧田氏のドキュメンタリー映画監督としての活動軌跡が概略的に述べられた。牧田氏が記録を取り始めた1980年代半ばは、35ミリフィルム、16ミリフィルムなどが主流であり、それらを用いて国の公共事業の記録映画などを作成していた。その後、時代はビデオの時代となりベータカムなどを用いてより長時間カメラを回すことが可能となった(フィルムの場合一回カメラを回すのが3分間ほどであったのが、ベータカムになって20分が可能となった)。そうした性質を活かしつつダムに沈む村のオーラル・ヒストリーなどのドキュメンタリー映画を作成していった。複数カメラでの多彩なアングルからの撮影もポピュラーな手法となった。2000年代以降はデジタルの時代に突入し、ふるさと創生事業などの映像も多く作成している。こうしたハード面での技術進歩は映像の性質にも多大な影響を与え、映像は特権的メディアとしての鑑賞物から文化映画、紀行番組、展示映像へと広がりを見せ、さらにより一般向けの作品あるいは利用可能なツールとしての映像へと、変化を遂げていくこととなった。

今回は特に、多様なツール映像を用いた民俗芸能の記録の取り組みについての詳細が説明された。牧田氏は民俗芸能に関して①一般向けの作品、②記録編、③継承編などの映像を作成し、踊りや芸能の見本に加えて、上演のコツの説明や口唱歌などを加えたもの、またインタビュー映像などを多角的に盛り込んだ作品を創ってきた。特にビデオからデジタルへの変化の時代に、多様なツールボックスを活用したアーカイブズシステムを考案し、一つの芸能について、地理的ロケーション、年間行事の概略、背景、監修者による基層文化についての考察、式次第、その他報告書の情報などを網羅した統合的システムを創っていった。

事例として、京都府京都市左京区久多の花笠踊りと、滋賀県朽木古屋の六斎念仏の映像が紹介された。第一の事例の花笠踊りについては、10曲の歌のレパートリーすべての記録、踊りの上演の記録などに加えて、上演に用いる花笠を作成する詳細なプロセスの記録映像などもあり、一つの芸能を支える多様な要素の重要性が示された。上記のアーカイブズシステムによって地図や背景や基層文化などについての充実した情報も参照可能になったことが示された。

第二の事例の六斎念仏の映像は、映像を継承に活かしていく事例として紹介された。2013年に限界集落となった朽木古屋では継承プロジェクトとして外部のダンサーやアーティスト

トを継承者として迎え入れ、念仏踊りの伝承が行われた。映像では集落外からのダンサーによる2016年の上演に加えて、それに影響を受けた地元の若者も加わった2017年の様子も描かれた。

まとめとして、これらの映像記録プロジェクトは内部の継承者たちへの刺激ともなった点、また一方で論争を呼んだ点があることが指摘された。たとえば第二の事例の六斎念仏はイベントとして観客に提示する上演と行事として実施上演とを分ける、などの動きも見られた。また継承者となったダンサーは自らの身体に六斎念仏をインストールしたことを意識し「民俗芸能アーカイバー」を自称して活動している点など、多くの興味深い観点が指摘された。

出口氏によるコメントは主に音楽を対象にした観点にフォーカスし、音の再利用・再現としての記譜に関する検討に続き、伝承現場における映像の再利用や動画の活用についての可能性と課題が提示された。従来の見て聴いて覚えるという習得方法の変化として、個人による動画撮影やYouTubeなどを用いた配信によって記録映像が蓄積されそれが活用される現象が見られる点が指摘されたとともに、近年のスマートフォンによる撮影が個人の知りたい情報に特化しているため記録の蓄積に結びつかないという課題も指摘された。また伝承の記録映像として過去の映像資料などを蓄積した事例として、和歌山県御坊市の御坊祭の事例が紹介された。

菌田氏による総括では、①大量の映像データをどのように使うのか、映像データは個人の担い手とどのようにつながっていくのか、②映像は芸能の伝承にどのような影響を与え、またどのように貢献し得るのか、③地域の芸能の担い手が映像を用いて記録することの可能性について、の3点の課題が示された。

フロアからの質疑応答では、このアーカイブズシステムにはどのような人々がアクセスしているのか、また普及させる媒体の種類は何か、などについての質問があり、ハードディスクやDVDといったソフトから人々が広くアクセス可能になるようなシステム作りの必要性などを指摘する応答がなされた。またカセット、MD、ベータカム、SDカードなどメディアが発展し変化していく中で淘汰されてしまうメディアの難しさについてのコメント、個人的視点からのスマートフォンでの撮影を学術的に活用していく可能性についてのコメントなどが見られ、興味深い議論が展開された。(福岡まどか)

第4回定例研究会レポート

第4回定例研究会

東日本地区担当

オンライン開催

日時：2026年3月7日(土) 13:00~15:20

司会：金 志善

内容：卒業論文発表2件と修士論文発表3件

1. 東北地方における民俗芸能の観光資源化

—「東北絆まつり」の意義と波及効果からみる「復興」—

山縣 青空 (東京音楽大学)

要旨

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、東北地方を中心に甚大な被害をもたらした。本発表は、この未曾有の複合災害からの復興に際し、広域連携型のイベントである「東北絆まつり」(2017年〜)を事例に、民俗芸能が地域コミュニティの復興において果たしてきた役割を検討するとともに、「災間の時代」における民俗芸能のあり方を再考するものである。

幾度となく自然災害に見舞われてきた東北地方にとって、破壊からの再生過程で育まれる「絆」は強力な紐帯であった。東北絆まつりは、東北六県の代表的な六つの夏祭りを集合開催する合同イベントであり、その特徴は「祭礼の近代化(モダンティ)」の肯定的受容と、被災経験を結節点とした新たな「絆」、つまり連帯の構築に大別することができる。

巨大災害が頻発する「災間の時代」における民俗芸能の役割を検討するにあたり、従来の拡大主義的な復興哲学(BBB: Build Back Better)に対し、社会の縮退を前向きに受容し、その過程における幸福を追求する「SSS(Save Sound Shrink: 縮小・楽着的復興)」(矢守, 2020)の視座を導入した。民俗芸能の担い手不足が深刻化する現代において、絆まつりのような広域連携型イベントは、地域住民が納得感を持って活動の幕を引く「尊厳ある芸能じまい」のためのソフトランディングの場として再定義され得るだろう。

縮退という社会の長期的なトレンドと、拡大主義をとる広域連携型イベントに生じる不和については、広域連携型イベントに代表される華やかな「拡大」と、コミュニティの「縮退」を分断するのではなく、両者を接続した「二層構造」の復興モデルを提示した。大規模イベントを資源還元「ハブ」として活用し、縮退を「死」ではなく「生のプロセス」として捉え直すことで、芸能の継承あるいはその終焉を社会的に支える理論構築を行うことこそが、「災間の時代」における急務である。

2. ジャワガムランにおけるクンダンの唱歌

渡部 佑有 (東京藝術大学)

要旨

本研究の目的は、ジャワガムランにおけるクンダンの唱歌(しょうが)の役割を明らかにすることである。ガムランで用いられる樽型の両面太鼓クンダンには、音色を口で言い表した、唱歌に相当する習慣がある。本研究では、筆者の受けたレッスンと演奏家へのインタビューをもとに、中型のクンダンであるチブロンについて、唱歌の様態と学習・演奏における機能を分析した。

第1章では、クンダンの唱歌が音色を示していることを確認したうえで、唱歌と記譜が個人や状況によって多様に変化することを明らかにした。その要因として、音同士の関係、音色やニュアンスの表れ、学習者に伝えるための工夫が挙げられた。

第2章では、唱歌を聞き取り、唱え、覚える活動は学習の中心にはなく、唱歌はリズムの伝達と記憶においてあくまで補助的に用いられるに過ぎないことを明らかにした。特に、音色を聴き分けて奏するのが困難な初心者にとっては、唱歌が音の代替的な表現として機能すること、また、熟練者は舞踊やワヤンとガムランとの合わせ方を思考する際に唱歌を用いることを明らかにした。

第3章では、唱歌が合奏において積極的な役割を果たしていないことを明らかにした。熟練のクンダン奏者は演奏中に唱歌を心の中で唱えることはなく、他の楽器の音を聴いて合わせることに注力する。これは、個人の技を披露することや定型通りに演奏することより、他の楽器の音や演奏する場の雰囲気を感じて即応的に演奏すること、すなわち音そのもので「会話する」ことを重視するガムラン演奏ならではの特徴であると考察した。

以上から、クンダンの唱歌は、言語による説明や実際の音の提示のみでは十分に伝達できない内容を補う手段であり、他者との協働やコミュニケーションを支える媒介として位置づけられる。これは、演奏目的のひとつに他者との協働があり、一音一音が他の楽器のために鳴らされるというジャワガムランの音楽自体が持つ性質と共通する。唱歌は音楽と深い関係を持ち、音楽性をも伝えるということを確認して、結びとした。

3. 江戸時代後期から明治期にかけての薩摩琵琶の展開

—琵琶歌の詞章調査と語り旋律の分析を通して—

明石 菜々実 (東京藝術大学大学院)

要旨

本発表では、薩摩琵琶が近代琵琶として確立する江戸時代後期から明治期にかけて、その音楽内容がいかに変化したのかを、資料調査および音楽分析の結果に基づき検討した。

薩摩琵琶は、江戸期を通じて薩摩地方で行われてきた語り物芸が、明治中期に東京へ進出して普及し、近代琵琶楽の一つとして確立した芸能である。この普及の過程において、上京した弾奏家によって改革が進められ、薩摩琵琶の音楽内容は、東京進出以前のあり方から大きく変化した。本発表では、このような歴史的状況を踏まえ、当該時期の音楽変容を、レパートリー、詞章形式、旋律様式の三点から検討した。

レパートリーについては、江戸期および明治期の琵琶歌を対象に、題材と詞章的特徴に着目して分析を行った。その結果、江戸期成立の琵琶歌には、合戦を題材とし古浄瑠璃風の語り口調を有する「崩」に加え、上方の三味線音楽の影響が想定される世俗的な歌など、複数の先行芸能に由来する多様なレパートリーが併存していたことが確認された。一方、明治期に入ると、新曲創作は「崩」の系統に集中し、琵琶歌の題材として合戦物へと収斂する傾向が見られた。

詞章形式については、現在の薩摩琵琶歌の定型とされる、七五調形式の成立過程を検討した。明治期に七五調に基づく新曲の創作が活発化するとともに、江戸期に存在した定型詩の歌が選択的に継承された結果、明治期を通じて七五調形式が段階的に定着したと考察した。

旋律様式については、幕末から明治期に存在した「土風」と「町風」の二系統に対し比較分析を行った。その結果、町風が節回しを伴う旋律性の高い語りを特徴とし、明治末期に登場する新たな薩摩琵琶の様式形成に重要な役割を果たしたことが明らかとなった。

以上より、江戸期に多様性を備えていた薩摩琵琶は、明治期における題材、詞章形式、旋律様式の選択と再構成を通じて、近代琵琶としての基盤を確立したことを指摘し、本発表の結びとした。

傍聴記

明石氏の本研究は、詳細な詞章分析から琵琶歌の七五調形式の定着時期を明らかにし、また従来文献資料に基づく言及に留まっていた薩摩琵琶の土風・町風の音楽的特徴を音楽分析から指摘するもので、薩摩琵琶の上京前後における音楽実態の解明に寄与する内容であった。質疑では、明治新曲の七五調形式について、琵琶歌作詞者と当時の新体詩との関連について質問が寄せられ、阪正臣や高崎正風といった琵琶歌作詞者の名を挙げ、新体詩との関連性も想定されると述べた。また、音楽分析に用いた音源資料の入手経緯を問われ、音源提供者が薩摩琵琶演奏の師匠からレコード録音を譲り受けた

ものと説明したほか、フロアから使用レコードの原盤に関する情報が提供された。土風の例として取り上げられた平豊彦は、後続流派の錦心流創始者・永田錦心の演奏との共通性が示唆される言説も残されている。資料は限られているが、弾奏家の経歴や琵琶関係者間の交流を音楽分析結果とあわせて検討することで、今後さらに考察が深まることが期待される。

(曾村 みずき)

4. 《春興鏡獅子》におけるジェンダー表現の探求

—歌舞伎における長唄のジェンダー・パフォーマンスの可能性—

モDESTウ, アナスタシア (東京藝術大学大学院)

要旨

本研究は、歌舞伎における長唄のジェンダー構築を考察するものである。歌舞伎特有の演劇形式のなかで、ジェンダーに関わる認識はその歴史を通して重要な関心事であり、女形や立役の演技が次第に洗練されてきた。本研究は、長唄舞踊《春興鏡獅子》に焦点を当て、歴史的背景、舞踊と詞章の関係、三味線の旋律や鳴物のリズムなどを分析し、それぞれにおけるジェンダー構築、及び音楽がジェンダーそのものを構築・表現する可能性を考察するものである。歌舞伎における長唄のジェンダー・パフォーマンスの可能性に焦点を当てながら、日本音楽におけるジェンダー表現研究に新たな視座を提示することを目的とする。

本研究ではジュディス・バトラの「ジェンダー・パフォーマンス理論」を枠組みとして応用し、先行研究の批判的検討を踏まえたうえで、《鏡獅子》の音楽と舞踊の分析を行う。

第2章「《鏡獅子》における舞踊と音楽の相互関係」では、長唄の成立史および「石橋物」との関係概説し、《鏡獅子》が演劇改良運動のなかで新たな技法を取り入れた作品であることを再確認する。さらに、舞踊と音楽の相互関係に注目し、振付がいかにジェンダーを構築しうるかを検討する。特に、「女性らしさ」や「男性らしさ」がどのように表現されているか、どの場面に強調されているかを分析し、音楽分析の基礎となる要素を明らかにする。

第3章と第4章では、《鏡獅子》の音楽分析を行う。第3章「小姓」における「女性らしさ」の構築」では、「クドキ」「川崎音頭」、「春は花見～夏木立」、流行り唄「飛驒の踊り～ほんにさ」、踊り地「恨み～時鳥」、「咲乱れたる～丁度廿日草」、そして【楽合方・引込合方】を中心に音楽分析を行う。第4章「胡蝶」における「男性らしさ」の構造」においては、大薩摩から【狂い合方】「牡丹の花に～くるくと」、および「花に戯れ～獅子王の勢ひ」【髪洗い合方】にかけての部分

音楽分析し、「男性らしさ」を表現する音楽的特徴を検討する。

結論では、音楽的要素のみならず、舞踊や社会的文脈との相互関係を通じてジェンダーが構築・表現されていることを明らかにし、長唄におけるジェンダー・パフォーマンスの可能性を提示する。

傍聴記

歌舞伎舞踊におけるジェンダーについて、明治26年初演の《春興鏡獅子》を取り上げて考察するという内容で、ジェンダーの考察には、舞踊と音楽の相互関係が重要との指摘がなされた。筆者は、音楽に焦点を絞っても明らかにできることがあるのではないかと改めて感じた。本発表ではテトラコルド理論を使って音楽分析が行われ、それも一つの方法だと思ふ。長唄研究者の植田隆之助氏(1927~2021)は、初期の長唄(享保~宝暦期)の特色を「女性的」とレコード解説などに書かれているが、何を女性的とするかは具体的でなかった。《春興鏡獅子》が原典とした《枕獅子》も初期の長唄で、音楽には共通する所が多いが、《枕獅子》から取り入れた「音頭」なども女方の舞踊によく出てくるかもしれない。一方、本研究で言及した《春興鏡獅子》後半の大薩摩は「男性らしい」イメージがある。長唄の現行曲を広く分析して、歌舞伎舞踊におけるジェンダーについてぜひ明らかにしてほしい。

(配川 美加)

5. 20世紀初期における中国国立音楽専科学校

—教育と制度を中心に—

LIU Cenxing (東京音楽大学大学院)

要旨

研究目的

本論文では、20世紀初頭の中国音楽教育を背景に、国立音楽専科学校(略称:国立音専)の設立経緯、教育制度・実践および社会的役割を検討した。特に、同校が中国近代音楽教育の制度化・専門化に果たした役割や、人材育成、演奏・創作活動を通じた社会文化への影響を整理し、分析した。具体的には、1928年から1937年にかけて刊行された校刊資料『音・国立音楽院-国立音楽専科学校院校刊集(1928-1937)上・下』を精査することで、教育制度・カリキュラム・教員や学生の状況・音楽活動など、当時の姿を総合的に検証した。

概要

第1章では、20世紀初頭の中国における音楽教育の状況と社会文化的背景を概観し、国立音専創設の必要性和先駆的意義を位置づけた。第2章では、同校の設立経緯と創設理念・目標を論じ、制度整備や外国人学生受け入れなど、教育近代化への取り組みを明らかにした。第3章では、管理体制、教

育方針、カリキュラム構成を分析し、西洋音楽理論の導入と中国伝統音楽の保存・発展を両立させた教育体制を整理した。第4章では、教員・学生構成と教育実践の特徴を示し、外籍教員の役割を明らかにした。第5章では、学生および教員の演奏会・社会活動を通じた教育実践を検討し、実技教育と社会参加の統合的効果を評価した。第6章では、国立音専の制度的・教育的・社会的意義を総括し、人材育成と教育理念が中国近代音楽教育と音楽文化の発展に与えた影響を論じた。

結論

本論文では、国立音専の創設から1937年までの教育制度・内容、社会的役割を検討した。その結果、同校は、欧米の近代音楽教育を参考に、中国に適合した専門的教育を整備し、各分野で優秀な人材を育成するとともに、演奏・創作活動・教育理念の社会的意義を具体化し、中国近現代音楽教育の基盤確立と音楽文化の発展に先導的役割を果たしたことが明らかにされた。今後は他の刊行物やそれ以外の資料を用い、教育内容・理念の詳細をさらに分析していきたいと思う。

傍聴記

1927年に上海に設立された国立音楽院はその後、国立音楽専科学校と改名し、中国の近代音楽教育の拠点となった。いわば、日本における東京音楽学校にあたる音楽学校である。

本発表はその教育内容と制度をテーマにしているが、すでに国立音楽専科学校については多くの先行研究が存在する。むしろ今、このテーマを掲げるのならば、先行研究にはない視点や新たな事実が提起されることを期待するところである。

例えば、近年、この音楽学校を取り巻く音楽環境が新聞など多言語資料を扱う研究により明らかになっている。すなわち、1920、30年代の上海租界は工部局オーケストラや亡命ロシア人のバレエ、音楽、オペラ、ラジオ放送の音楽番組などアジアでも先進的な音楽環境を生み出していた。音楽専科学校の教員や生徒もその環境の中にいた。アジアの中でも最も先進的な音楽環境という文脈の中で学校を論じる必要があると考える。

(井口 淳子)

これからの定例研究会の予定

今後の定例研究会は、以下の通り予定しております。詳細は決まり次第学会ウェブサイトでお知らせいたします。

第7回定例研究会(西日本地区担当)

2026年5月31日(日) 予定

場所: 大阪大学中之島芸術センター

内容: 修士論文発表および研究発表

第8回定例研究会(東日本地区担当)

2026年6月6日(土) 予定

オンライン開催

内容: 博士論文発表

第9回定例研究会(西日本地区担当)

2026年7月11日(土) 予定

場所: 大阪大学中之島芸術センター

内容: 講演およびパフォーマンス

第10回定例研究会

開催日等未定

研究企画委員会からのお知らせ

研究企画委員会では、2026年9月26日(土)の定例研究会(東日本地区担当、オンライン開催)における発表を募集しています。発表をご希望の方は、発表種(研究発表・報告等)、発表題目、要旨(800字以内)、氏名を明記の上、2026年7月18日(土)までに研究企画委員会にメール(toyokki@googlegroups.com)でお申し込みください。なお、発表希望をご提出後1週間経っても研究企画委員会から連絡がない場合には、メール事故等の可能性がありますので、お手数ですが、再度ご連絡ください。

第43回田邊尚雄賞授賞発表

第43回田邊尚雄賞は、下記のように決定いたしました。

【受賞者・授賞対象】

1. 村山佳寿子『箏曲点字楽譜の誕生—伝統音楽の近代化と盲学校における音楽教育—』(六花出版、2025年9月30日発行) ISBN978-4-86617-310-8

2. 澤田篤子『声明理論の形成過程—平安・鎌倉期を中心に—』(法藏館、2025年12月20日発行) ISBN978-4-8318-6074-3

【選考経過】

対象期間中に刊行された会員の業績12作のうち、授賞候補としての要件を満たす11作を選考対象とし、回覧・精読を行った。第一次選考(2026年2月20日)で上位5作に絞り込み、3月15日にzoomで開催した第43回田邊尚雄賞選考委員会において慎重に審議した結果、全会一致で上記2作が

授賞にふさわしいとの結論に達した。

【授賞理由】

1. 村山佳寿子『箏曲点字楽譜の誕生—伝統音楽の近代化と盲学校における音楽教育—』は、箏曲の点字楽譜というこれまでになかった切り口から、日本音楽史の近代を描き出した意欲作である。点字資料を含む一次資料の丹念な分析により、箏曲の点字楽譜それ自体の成立過程を明らかにしているだけでなく、その背景にある社会的・教育的・音楽的な諸問題を幅広く論じることにより、日本における「近代」とは何であったかという普遍的な問題に、新たな視座を提示することに成功している。洋楽受容史、学校教育史、宮城道雄研究など、様々な分野に重要な知見を与える優れた研究成果であり、巻末における宮城道雄の自筆点字楽譜一覧及び点字楽譜の翻刻は、資料的価値も高い。

2. 澤田篤子『声明理論の形成過程—平安・鎌倉期を中心に—』は、安然『悉曇藏』及び湛智『声明用心集』を中心として、主に平安時代から鎌倉時代にかけての声明理論の形成過程を論じた大作である。難解で知られ研究が不十分であった両書に正面から取り組み、現在知られている両書の周辺の声明理論書をほぼ網羅した上で、雅楽のみならず平家や能をも視野に入れ、古代から中世にかけての音楽理論の歴史的展開について、基本的な展望を明らかにした。声明研究をはじめ、日本・東洋音楽史、仏教学、音韻学など、多くの専門分野において今後必須の重要な先行研究となるだけでなく、近年の音楽人類学や民族音楽学の動向に重ね合わせうる側面をも備えている。

以上により、上記2作は、田邊尚雄賞の趣旨にふさわしい研究成果として、高く評価することができる。

選考委員 高瀬澄子(委員長)、遠藤徹、奥中康人、佐本英規、濱崎友絵

第44回田邊尚雄賞アンケートのお願い

第44回田邊尚雄賞選考委員会では、新刊情報を広く収集しています。会員の業績を顕彰する貴重な機会ですので、著作物を出版される際は、選考委員会までお早めにお知らせ下さい。自薦のほか他薦も歓迎いたします。

選考対象: 2026年1月1日~12月31日の発行物
受付期間: 随時。締切は2027年2月上旬(予定)。
記入事項: 著者名、書名、発行年月日、発行所名。

なお、論文の場合は、掲載誌名・巻次・編集者名・論文頁数も記して下さい。推薦理由を簡潔にお書き添えていただいても構いません。

▶送付先：東洋音楽学会 第44回田邊尚雄賞選考委員会
(郵送)〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル307号
(Fax) 03-3832-5152
(電子メール) LEN03210@nifty.com

※ご連絡の受け取り確認などは遅れる可能性もあります。

選考委員：(再任) 遠藤徹、佐本英規

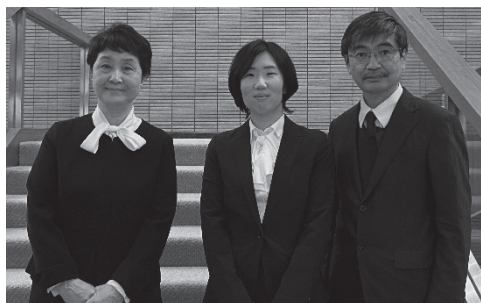
(新任) 明木茂夫、島添貴美子、増野亜子

会員の受賞

本学会会員の中川優子さんが、2025年度日本学術振興会育志賞を受賞されました。本賞には、中川さんの在学先である東京藝術大学大学院音楽研究科とともに、東洋音楽学会からも、中川さんを推薦いたしました。晴れて受賞する運びとなり、心からお祝いを申し上げます。中川優子さんは育志賞と合わせて、東京藝術大学の平山郁夫文化芸術賞(平山郁夫奨学金)も受賞されました。重ねてお祝い申し上げます。



育志賞授賞式にて



指導教員の塚原康子さん、植村幸生さんと

本学会会員の中川優子さんが、インドネシア文化賞(AKI2025 Anugerah Kebudayaan Indonesia 2025)(海外部門)を受賞されました。本賞は、インドネシア共和国政府の文化省が、インドネシア文化の普及活動や研究活動に対し

て尽力した機関や個人に対して授与する賞です。海外部門では海外の20の研究機関と個人研究者・文化人が選ばれますが、福岡まどかさんは個人研究者として受賞されました。心よりお祝いを申し上げます。おめでとうございます。

第28回通常理事会議決事項のお知らせ

2026年4月12日(日)に、東京神田ウィルシャーIVおよびweb会議システムZoomを用いて第28回通常理事会が開催されました。主な議決事項をお知らせいたします。

1) 新入会員について

前回理事会(2025年10月12日)以降に申し込みのあった正会員13名、学生会6名の入会が正式に承認されました。

2) 令和8年度研究発表大会および公開講演会について

本号の関連記事をご覧ください。

3) 令和8年度事業計画の件

【添付書類1】の通り承認されました。

4) 令和8年度収支予算の件

【添付書類2】の通り承認されました。

5) 第43回田邊尚雄賞受賞者について

本号の関連記事をご覧ください。

6) 第44回田邊尚雄賞選考委員について

遠藤徹、佐本英規(以上、留任)、明木茂夫、島添貴美子、増野亜子(以上、新任)の5氏に委嘱することが承認されました。

7) 令和8年度日本学術振興会育志賞の学会推薦について

推薦基準に沿う会員がいないため、今回は学会推薦は行わないこととしました。

8) 長期会費滞納者については、各理事が可能な範囲で連絡をとることになりました。

9) 参事委嘱について

中山誠也氏への本部(総務)参事の委嘱、東館祐真氏への本部(広報)参事の委嘱が承認されました。

10) 次期理事定数の件

令和7年度に実施する次期の役員選挙の理事の定数を15名とすることが承認されました。

会員名簿掲載の「常任委員会規程」の訂正

『東洋音楽研究』第90号の別冊として昨年8月に会員の皆様へ送付した『一般社団法人東洋音楽学会会員名簿(2025年7月現在)』に掲載されている「一般社団法人 東洋音楽学

会常任委員会規程(写)」(p.99)の第2条の記載に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

誤：(5) 研究企画委員長

正：(5) 研究企画委員長・副委員長

田邊賞基金および今後の学会賞についてのお知らせ

田邊尚雄賞は、東洋音楽学会の初代会長で、のちに名誉会長となった音楽学者の田邊尚雄氏より、研究業績の表彰事業のための資金として御寄附をいただき、その御厚意をお受けして昭和58(1983)年度から実施されている歴史ある賞です。しかし、この田邊賞基金も残すところあとわずかとなり、従来の方での授賞は第45回(2027年度)で終了する見込みです。今後も田邊賞に相当する学会賞を継続する意向ですが、現行の方法では経理的に難しい状況です。理事会では、田邊賞基金が尽きる再来年以降の学会賞の授与方針について素案をまとめ、2026年秋の総会に向けて、会員みなさまにお諮りする準備を進めております。4月12日の通常理事会では、次のような議論がなされました。

1. 基金終了後の名称変更(「田邊尚雄記念賞」「田邊尚雄東洋音楽学会賞」「東洋音楽学会賞」、大口の寄附があった場合、寄附者の名前を冠した名称 など)
2. 財源確保の方法...①副賞の減額、②寄附金の募集 など
3. 1.や2.に伴う、学会賞授与に関する規程の見直し

なお、毎年5名から成る選考委員会を組織すること、授賞年の前年(1月1日～12月末日)に発行された会員の研究業績が対象となることは変更ありません。

今秋の総会に先立って、上記3点について会員の皆様のご意見(特に2.)を下記E-mailもしくは郵送でお寄せいただきたく、ここにお願い申し上げます。

○今後の学会賞に関するご意見募集

送付先：東洋音楽学会事務所

E-mail: LEN03210@nifty.com

(郵送)〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル307号

締め切り：2026年6月末日

情報委員会からのお知らせ

1. 126号より会報は原則としてメール配信に移行しました。今回、郵送で受け取った方で、メールでの受信が可能な方は、情報委員会(togictmt@gmail.com)にメールアドレスをお知らせください。

2. 『東洋音楽研究』の創刊号から73号については、2012年に独立行政法人科学技術振興機構(JST)によりインターネット公開されていましたが、それ以降の号についても、バックナンバーをインターネットで公開することとなりました。インターネットでの公開は機関誌発行から2年後とし、2023年8月に発行された『東洋音楽研究』88号から順次遡って公開作業を進めています。電子化されるのは、論文、研究ノート、書評などの学術的記事です。以下のURLから閲覧することができます。

<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/toyoongakukenkkyu/list/-char/ja>

3. 『東洋音楽研究』74号から79号に学術的記事が掲載されている著者の方々には、インターネット公開に関することについて同意をお願い申し上げます。ご了承いただけない場合には、2026年5月31日までに情報委員会宛に電子メールでお申し出ください。

4. 会員情報の変更は学会ウェブサイトから届出ができます。トップページの上にある「会員の皆様へ」をクリックし、ログインIDとパスワードを入力すると「東洋音楽学会名簿登録・修正フォーム」にアクセスできます。ログインIDとパスワードは会報125号に同封した別紙でご確認ください。ご不明の場合は情報委員会にお問い合わせください。会員情報の変更は上記の登録フォームの他に、学会事務所宛のメール(LEN03210@nifty.com)やファックス(03-3832-5152)でも受け付けています。

選挙管理委員会からのお知らせ

本年は、理事及び監事の改選の年にあたります。以下の二点についてお知らせします。

◇被選挙権の休止の希望について

定款施行細則第13条第4項に「定款に定めるところの役員を通算して8期以上務めた正会員は、選挙の度ごとに本人の希望によりその1期に限ってその理事の被選挙権を休止す

ることができる。」とあります。また、同第5項に「選挙実施年の9月1日において、満70歳以上の者は、選挙の度ごとに本人の希望によりその1期に限ってその被選挙権を休止することができる」とあります。この条件に該当し、かつ休止を希望する正会員は、6月15日(月)までに、下記の東洋音楽学会選挙管理委員会宛に、文書(電子メールを含む)にてお申し出ください。

〔東洋音楽学会選挙管理委員会〕

〒213-8580

神奈川県川崎市高津区久本2-3-1

洗足学園音楽大学 山本華子

E-mail: tog.election2026@gmail.com

◇選挙名簿の作成について

選挙管理委員会では選挙用会員名簿を作成します。名簿には「正会員の姓名」を記載することになっています。つきましては、『東洋音楽研究』第90号別冊として配布された名簿の記載事項に変更のある方で、まだ届けておられない方は、その変更内容を、6月15日(月)までに学会事務所宛 (LEN03210@nifty.com)、電子メールにて、ご連絡くださるようお願いいたします。ご連絡のない場合には、現在事務局にある名簿にしたがって記載することになります。

〔2026年度選挙管理委員〕(五十音順)

黒川真理恵、澤田篤子(委員長)、壽美玲子、馮蕊、山本華子(副委員長)

会費納入のお願いと大学院生会費割引のお知らせ

1. 会費納入のお願い

2025年9月から新しい年度(2025年度)が始まりました。会費未納の方は、金額をお確かめの上お払くださいますよう、お願い申し上げます。振込用紙を紛失された場合は、下記学会口座宛にお振込ください。なお、本会報と入れ違いに納入された場合はどうぞご容赦ください。

正会員：8,000円

学生会員(大学院生を除く)、および割引申請者：6,000円

○郵便局からの払込

ゆうちょ銀行[口座番号] 00160-6-55723 [加入者名] 一般社団法人東洋音楽学会

○他金融機関からの振込

ゆうちょ銀行[支店名] 〇一九(ゼロイチキュウ)店(019)

[当座] 0055723

○オンライン決済サービスによる納入

ペイパル(PayPal)によるオンライン決済でも会費が納入できます。学会ウェブサイトのトップページ(<http://tog.a.la9.jp/>)の「入会方法はこちら」をクリックし、「入会方法」のセクションをご覧くださいと納入ボタンがあります。オンライン決済にはペイパルへのログインが必要です。ペイパル・アカウントをお持ちでない方は、アカウントを開くと送金できます(アカウント開設費無料)。なお、オンライン決済には手数料が発生するため、納入金額は以下のようになります。

正会員：8350円

学生会員(大学院生を除く)、および割引申請者：6280円

2. 会費割引制度のお知らせ

本学会には、夫婦・親子割引、大学院生(博士課程・修士課程)・研究生割引の制度があります。それぞれ条件や申込方法が異なります。学会のホームページ(<http://tog.a.la9.jp/about.html#7>)でご確認の上、お申し込みください。なお、大学院生の割引制度を受けるためには「大学院生会費減額措置願い」と学生証のコピーを、また研究生の割引制度を受けるためには、「研究生会費減額措置願い」と学生証のコピー、履歴書が必要です。次年度以降も継続して減額措置を希望する場合は、毎年、前年度末すなわち8月31日までに、「減額措置願い」を提出する必要があります。

3. 会費の滞納者へのご注意

滞納がありますと、会員の権利(研究会・大会での発表、学会の発行物の受取)が行使できないことがありますのでご注意ください。

4. 卒論・修論の発表者へのご注意

発表を機に入会された会員にも、新年度の会費納入義務が発生いたします。退会するためには退会届が必要です。その旨ご了解のうえ、会費の納入にご協力ください。

『東洋音楽研究』原稿募集のお知らせ

学会機関誌『東洋音楽研究』第92号(2027年8月刊予定)の原稿を募集いたします。

投稿を希望される方は、学会機関誌最新号に掲載予定の「投

稿規定」および「投稿の手引き」(学会ホームページにも記載あり)をよくお読みの上、ご投稿ください。「投稿規定」および「投稿の手引き」は機関誌編集委員会で改訂を行うことがあります。必ず最新号でご確認ください(投稿原稿の送付方法が、郵送からメールに変更されています)。

分量の限度の守られない投稿がしばしば見受けられます。各原稿の字数制限は、本文、注、文献表、譜例、図表、写真などを含むものとなっておりますので、ご注意ください(投稿の際は、必ず字数を明記してください)。

送付方法: メールに PDF と MSWord の文書を添付の上でお送りください。メールでの送付が難しい場合には、編集委員会または学会事務局へご相談ください。

送付先: 東洋音楽学会事務局<LEN03210@nifty.com>と東洋音楽学会機関誌編集委員会の 2 か所にお送りください。編集委員会のメールアドレスは後日、学会ホームページに掲載いたします。

締切: 2026 年 11 月 27 日 (金) 必着

ICTMD (国際伝統音楽舞踊学会) に関するお知らせ

1. 第 9 回 ICTMD 東アジア音楽研究会(MEA)シンポジウム開催のお知らせ

ICTMD 東アジア音楽研究会 (Study Group on Musics of East Asia=MEA) の第 9 回シンポジウムは以下の通り開催されます。

日時: 2026 年 7 月 2 日~5 日

開催地: 国立台湾師範大学 (7 月 2 日)、国立伝統芸術中心 (7 月 3 日~5 日)

プログラム実行委員 (敬称略、アルファベット順)

Man-Ying Sheryl Chow

Meng-Tze Chu

Hyelim Kim

Naoko Terauchi

Shuo Niki Yang

Anna Yates-Lu

シンポジウムの詳細は MEA のホームページをご参照くだ

さい: <https://ictmusic.org/studygroup/mea>

2) ICTMD 第 49 回大会は以下の通り開催されます。

日時: 2027 年 1 月 14 日~20 日

開催地: Universidad Alberto Hurtado, Santiago, Chile

大会テーマ:

1) Latin America and the Caribbean in the Region and Beyond

2) Digital Media

3) Power, Conflict, and Planetary Health

4) Spiritual and Religious Performativities

5) Queering the Field

6) Alternate Histories

7) New Research

詳細は <https://www.ictmusic.org/ictmd2027> をご覧ください。

RILM (音楽文献目録) 委員会からのお知らせ

◇『音楽文献目録オンライン』の状況

『音楽文献目録オンライン』では、既刊の冊子体『音楽文献目録』41号以降の文献を Web で掲載中です。事務局に情報が届いた文献のうち、2024年6月に選定された分までの文献が公開されています。それ以降の文献も、順次公開される予定です。同時に既刊の冊子体の目録の遡及入力も行われており、40号と38号、35号までが完了し、会員のみならずには過去の目録も含めて Web で検索・閲覧できるようになりつつあります。

また『音楽文献目録オンライン』上の広告は 2022 年 4 月 1 日から開始しておりますが、広告枠にはまだ余裕があり引き続き募集 (5,000 円~) しています。現在、母体団体として東洋音楽学会のパナー広告の掲載も行われています。

なお、冊子体の遡及入力のための基金を募集しており、今年度、当学会からも 3 万円の寄付をいただきました。引き続き、ご協力をよろしくお願いいたします。

◇東洋音楽学会会員の『音楽文献目録オンライン』へのアクセス

本学会 HP に表示される「音楽文献目録オンライン」をクリックした後、ID とパスワードを入力してアクセスして下さい。本学会会報 122 号に同封された別紙に『音楽文献目録オンライン』にログインするための ID とパスワードが掲載されています。それらを入力してアクセスしてください。会員

限定情報であるため、今後会報には掲載しないこととなりました。IDおよびパスワードについてのお問い合わせは、情報委員会 (togictcmt☆gmail.com ☆を@に変更してください) までお送りください。

小島美子先生を偲んで

塚原康子

本年2月27日小島美子先生が逝去された。昨年11月にも演奏会で元気なお姿を拝したので、今でも信じられない思いでいる。

小島先生は1929年3月7日福島市に生まれ、幼少期からピアノに親しんだ。「私は軍国少女だったのよ」と伺ったことがあるが、16歳で敗戦を迎え占領下に青年期を送る。1945年福島高等女学校卒業後、日本女子大学校国語学科ついで東京大学国史学科に学び、公立中学校の国語科教師を経て、1958年東京藝術大学楽理科に入学した。音楽研究に先立って隣接する文学・歴史学を専攻したことになるが、東大在学中は合唱運動に没頭、内田り子・間宮芳生と交流し原太郎・清瀬保二に作曲の手解きを受けるなど音楽に明け暮れた由。1950～60年代の西洋音楽や現代邦楽を同時代体験として聴く。藝大では小泉文夫先生の民俗音楽ゼミナールでわらべうたや沖縄音楽の共同調査に加わり、卒論・専攻科論文では当時ほぼ未開拓の日本歌曲研究に取り組んだ。60年代に発表された日本歌曲や童謡・新民謡の分析的研究のもつ先駆性は今も色あせない。

しかし、研究を進める過程で伝統音楽の重要性に目覚め、その全体像の把握を志向して民俗音楽研究へと舵を切る。九学会連合による下北半島・利根川流域・沖縄・奄美等の総合調査に本学会の派遣委員として参加し、本田安次先生と宮崎出身の御母堂の縁で椎葉村にも長く調査に通った。1985年国立歴史民俗博物館着任後は「日本民謡データベース」(2007年より同館で公開)構築を推進、研究手法ではフィールドワークや音楽分析に力点を置く「音の聞こえる日本音楽史」を唱え、日本民俗音楽学会設立にも尽力する。藝大やお茶大での専門講義や『日本の音楽を考える』『音楽からみた日本人』等の著作を通じて後進に大きな影響を与える一方、早大ほかでの講義や放送では「専門でない人々に音楽をどう伝えるか」に心を砕き、伝統音楽の担い手の支援にも注力した。

本学会では理事を2期(1970-71年、1978-79年)、監事を9期(1972-77年、1980-91年)務めた。戦後に道を切り開いた女性研究者の第一世代であり、男女を問わず先生の懐の広さと温かさに導かれた後学の者は少なくない。最後まで世の中の動きを注視し、手書きで原稿や講演資料をまとめ、ヘル

パーさんの助けを借りつつ一人暮らしを貫いた。今頃は先に他界された御夫君やかつての研究仲間たちと甘いもの片手にワイワイガヤガヤ研究談義を再開されているのではないかしらと思っている。小島先生、本当にありがとうございます。ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

会員異動

個人情報のため削除

◆登録事項の変更先

学会ウェブサイトの「名簿情報登録フォーム」をご利用ください。インターネットを使用した回答が難しい方は、学会事務局 (LEN03210@nifty.com または Tel/Fax 03-3832-5152) までご連絡ください。

図書・資料等の受贈

(2026年1月～4月、到着順)

『日本伝統音楽研究』第21号、第22号
京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター
『楽道』1,3月号 (公財)正派邦楽会
『東方學會報』No.129 (一財)東方学会
『ジャワの影絵芝居、海を渡る—みんなく映像民族誌
第57集』(DVD) 福岡正太監修 国立民族学博物館
『伝統と創造：東京音楽大学付属民族音楽研究所研究紀要』
Vol.15 東京音楽大学付属民族音楽研究所

新刊書籍

『「新しい芸能」の誕生：地域市民演劇の〈トポス〉の拡大と変容』 片山幹生(編)、森話社、3,520円
『アフリカ音楽に出会う本』ムクナ・チャカトウンバ(著)ほか、ヤマハミュージックエンタテイメントホールディングス、2,200円
『インド古典音楽入門：ヒンドゥスターニー古典音楽の世界』プラバー・アトレ、スタイルノート、5,500円
『演奏家からみた武満徹：揺れる鏡にうつるもの』原壘、音楽之友社、2,860円
『演奏者のための健康教育：標準化と質の保証を目指して』赤池美紀、東京大学出版会、6,380円
『音紡ぎ：山伏になった音楽学者、風を聴く』大内典、かもがわ出版、1,980円
『オンカク：音楽家、指導者、フリーランスのための確定申告・税金ガイド。2026改訂版』栗原邦夫、音楽之友社、1,540円
『音楽史事典』日本音楽学会(編)、丸善出版、24,200円
『音楽大学・高校 入試問題集2026 国公立大 私大 短大 高校 大学院』音楽之友社(編)、音楽之友社、7,700円
『怨霊と鎮魂で読み解く日本芸能史』井沢元彦、笠間書院、2,200円
『楽譜が読める・弾けるステップ20 新装版』甲斐章、音楽之友社、2,310円
『歌舞伎 研究と批評 70 特集・『東海道四谷怪談』の二百年』

歌舞伎学会(編)、文学通信、2,512円
『歌舞伎の東西：上方と江戸の絵入り出版物』青山学院大学文学部日本文学科(編)、花鳥社、1,980円
『歌舞伎評記集成 第三期 第九巻』役者評記発行会(編)、和泉書院、17,600円
『歌謡と芸能：在原業平の表象』児玉絵里子、勉誠社、4,180円
『間文化性から音楽を考える 20世紀音楽をめぐる批評と分析』安川智子(編著)、藤田茂(編著)、音楽之友社、3,300円
『巨匠指揮者列伝 名盤でたどる88人 [ア～セ]』山崎浩太郎、音楽之友社、2,420円
『巨匠指揮者列伝 名盤でたどる88人 [タ～ワ]』山崎浩太郎、音楽之友社、2,420円
『近世後期の皇位継承と天皇・女院』佐藤一希、思文閣、8,800円
『クラシック音楽への招待 子どものための40の楽曲たち』飯田有抄、音楽之友社、2,200円
『現場で生きる打楽器術：演奏の極意と奥義』西久保友広、音楽之友社、2,200円
『これからの時代を生きるすべての子どもたちへ 音楽教育のススメ 改訂版』小林洋子(編)、沼田峰紀(編)、幻冬舎、990円
『三代御記 全現代語訳』倉本一宏、講談社、2,200円
『サンリオキャラクターズと学ぶ! はじめての歌舞伎』関亜弓、Gakken、1,540円
『指揮者飯守泰次郎 ワーグナーと人生を語る』飯守泰次郎(著)とねりこ企画(編)、音楽之友社、3,960円
『新装版 ショパンの生涯』ハレバラ・スモレンスカ=ジェリンスカ(著)、関口時正(訳)、音楽之友社、3,960円
『新装版 ポケット音楽辞典』音楽之友社(編)、音楽之友社、1,650円
『新装版 ポケット楽典』大角欣矢、音楽之友社、1,485円
『身体に宿る芸能知：カンボジア古典舞踊ロバム・ボランの継承と変容の民族誌』羽谷沙織、東信堂、9,900円
『図表とともに学ぶ西洋音楽史概説』村田千尋、春秋社、3,520円
『すべての管楽器奏者へ ある歯科医の提言 [新装・改訂復刻版]』根本俊男、音楽之友社、2,200円
『政治と音楽II：人々の心が織りなすグローバル関係』半澤朝彦(編)、晃洋書房、3,080円
『接続の絆・切断の夢：音楽文化のなかの〈個〉と〈集団〉』井手口彰典、春秋社、2,750円
『増補新版 歌舞伎 家と血と藝』中川右介、講談社、1,870円
『小さな「戦犯」：音楽家たちの戦争責任』小松田健一、高文研、2,420円
『中右記 躍動する院政時代の群像』

- 戸田芳実、講談社、1,760円
 『中世芸能史の研究』 林屋辰三郎、岩波書店、12,100円
 『つなげる劇場、つながる劇場』
 辻英史(編)、法政大学出版局、6,160円
 『伝統芸能の怖い話』 月の砂漠、竹書房、803円
 『東寺執行日記 第二巻』
 東寺文書研究会(編)、思文閣、15,400円
 『東寺百合文書 第十巻』
 京都府立総合資料館(編)、思文閣、11,660円
 『東寺百合文書 第十三巻』
 京都府立京都学・歴史館(編)、思文閣、14,850円
 『解きながら楽しむ大人の西洋音楽史』
 久保田慶一、くもん出版、1,650円
 『新嘗と大嘗の民俗学：南島から宮廷まで』
 新宮正樹、郁朋社、1,650円
 『日本民謡曲撰 一の巻』
 藤井清水(著)ほか、長江希代子(編)、音楽之友社、3,300円
 『日本民謡曲撰 二の巻』
 藤井清水(著)ほか、長江希代子(編)、音楽之友社、3,300円
 『人形浄瑠璃文楽における伝承と現在 制作者の視座から』
 後藤静夫、琥珀書房、6,930円
 『能と狂言 巻次：23』 能楽学会(編)、ペリかん社、2,200円
 『野口雨情：正伝』 佐々木靖章、笠間書院、9,350円
 『飛”(ヒ)！電磁民族音楽』 和田永、電気書院、1,980円
 『舞楽図の近世的展開：形成・変奏・復古』
 古谷美也子、勉誠社、9,900円
 『舞踊・社会学的考察による民俗芸能の社会統合の力』
 中村まい、多賀出版、4,400円
 『平安時代の共感と過去認識：仮名文学を支えた思想』
 長田明日華、塙書房、7,150円
 『もうひとつの唐朝 仏教と中心化する「周縁」』
 中田美絵、思文閣、11,000円
 『モーリス・ラヴェル』 ロジャー・ニコルズ(著)、
 神保夏子(訳)、平野貴俊(訳)、音楽之友社、9,020円
 『やさしい三味線講座：五線と文化譜でわかりやすい！[2026]』
 千葉登世、自由現代社、2,090円
 『遊女の中世史：遊郭の文化に生まれたのか』
 辻浩和、吉川弘文館、1,980円
 『琉球列島に根ざした言語文化と学校教育』
 中本謙、村上呂里、三省堂、1,760円
 『レコード店の文化史：グローバル・ヒストリー：コミュニティ、都市、文化が交差する場所』
 ジーナ・アーノルト(編)ほか、DU BOOKS、4,620円
 『ロックミュージックの社会学 決定版』
 南田勝也、青弓社、2,860円

新発売視聴覚資料

●CD

- 『秋田大黒舞 / 秋田音頭』 金沢明子、NKS-779、2,420円
 『江戸吉原物語-端唄・小唄が紡ぐ遊郭の光と影-』
 吉原芸妓連中(ほか)、COKM-46264、<配信限定>
 『立神』 武下和平、VICG-5412、<配信限定>
 『蛭袋』 前田卓霊(ほか)、COCJ-42628、3,000円
 『らんまん踊り／恋をするなら』
 藤 みち子(ほか)、VZCG-10591、1,500円
 『令和8年度 コロムビア総おどり曲集』
 美空ひばり(ほか)、COCJ-42627、1,700円

編集後記

会報第127号をお届けします。今号には、秋に行われる第77回大会の情報が掲載されております。会員の皆様には、会報をご確認の上、奮ってご参加くださいますようお願い申し上げます。

さて、今号の発行に先立ちまして、4月12日に第28回通常理事会が開催されました。このたびの理事会では、田邊尚雄賞と今後の学会賞について議論の場が持たれました。会員の皆様にも「田邊賞基金および今後の学会賞についてのお知らせ」をご一読の上、ご意見を頂けましたら幸いに存じます。また、理事会はこの秋に改選を予定しております。選挙管理委員会からのお知らせもご覧ください。理事会全体のご報告につきましては、今号の末尾に掲載しております。併せてお目通しくださいませ。

会報編集委員会では、参事の今泉佳奈さんが、本年4月をもって会報担当参事を退任となりました。今泉さんには長きにわたり、多大なご助力をいただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。また、本年5月より新たに東館祐真さんが、参事として会報編集委員会に加わってくださることとなりました。よろしく願いいたします。

会員の皆様には、今後とも会報の発行にご協力、ご支援を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

土田牧子

会報編集委員会

理事：土田牧子、高松晃子

参事：井上環、今泉佳奈、神田花菜子、倉地真梨、玉置彩乃、東館祐真、吉岡倫裕

第28回通常理事会添付書類

〔添付書類1〕

令和8年度(2026年度)事業計画

(自令和8年(2026年)9月1日 至令和9年(2027年)8月31日)

〔1〕研究発表会および学術講演会の開催(定款第5条1)

(1)公開講演会の実施(定款施行細則第3条1)

- ・日時 2026年11月7日
- ・会場 国立音楽大学
- ・課題 「多摩地域の歴史と芸能―八王子車人形―」(仮題)

(2)研究発表大会の実施(定款施行細則第3条2)

- ・日時 2026年11月8日
- ・会場 国立音楽大学

(3)次年度大会の準備

- ・日時 2027年10月または11月
- ・会場 東京藝術大学

(4)定例研究会(定款施行細則第3条3)

- ・回数 10回 第11回～第20回(9・10・12・1・2・3・4・5・6・7月の予定)
東日本地区6回程度、西日本地区3回程度、沖縄地区1回程度
- ・会場 対面(会場未定)およびオンライン開催
- ・内容 シンポジウム、研究発表、卒業論文・修士論文・博士論文発表ほか

〔2〕学会誌および学術図書の刊行(定款第5条2)

(5)機関誌『東洋音楽研究』の刊行(定款施行細則第3条4)

○第91号の編集・刊行

- ・内容 会員の論文、研究ノート、資料、書評ほか

(6)会報の刊行

○『東洋音楽学会会報』

- ・第128号(2026年9月)、第129号(2027年1月)、第130号(2027年5月)
- ・内容 会員への諸通知、理事会・総会記録、例会レポート、例会開催案内、大会開催案内、大会レポート、新刊図書・新発売視聴覚資料紹介、会員異動

〔3〕 関連学協会との連絡および協力（定款第5条3）

(7) 日本学術会議への協力

○日本学術会議協力学術研究団体として協力

(8) 音楽文献目録委員会への参加

○会員三名を委員として派遣

(9) ICTMD(国際伝統音楽舞踊学会)への協力

○日本国内委員会として加盟

(10) 東洋学・アジア研究連絡協議会への参加

○会員一名を委員として派遣

〔4〕 研究の奨励および研究業績の表彰（定款第5条4）

(12) 「田邊尚雄賞」（定款施行細則第3条5）

○第43回田邊尚雄賞の授賞

・日時 2026年11月7日

・受賞者および授賞対象

1. 村山佳寿子『箏曲点字楽譜の誕生—伝統音楽の近代化と盲学校における音楽教育—』（六花出版、2025年9月30日発行）ISBN978-4-86617-310-8

2. 澤田篤子『声明理論の形成過程—平安・鎌倉期を中心に—』（法藏館、2025年12月20日発行）ISBN978-4-8318-6074-3

○第44回田邊尚雄賞の選考と発表

〔5〕 研究および調査（定款第5条5）

(13) 国内または国外における学術調査および研究

とくになし

〔6〕 その他目的を達成するために必要な事項（定款第5条6）

(14) 東洋音楽学会ホームページを通して行なう学会情報の提供

(15) 独立行政法人科学技術振興機構（JST）電子アーカイブ事業への参加

(16) 「人間文化研究機構国立民族学博物館との連携に関する協定」の遂行

〔添付資料2〕

一般社団法人東洋音楽学会

収 支 予 算 書

令和8年9月1日から令和9年8月31日まで

(単位：円)

科 目	予 算 額	前年度予算額	増 減	備 考
I 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
基本財産運用収入	500	500	0	
基本財産利息収入	500	500	0	
特定資産運用収入	100	100	0	
特定資産利息収入	100	100	0	
入会金収入	0	0	0	
会費収入	3,870,000	3,870,000	0	
正会員会費収入	3,600,000	3,600,000	0	
賛助会員会費収入	150,000	150,000	0	
特別会員会費収入	120,000	120,000	0	
事業収入	1,258,000	974,500	283,500	
機関誌発行収入	320,000	350,000	△ 30,000	
大会広告料収入	360,000	300,000	60,000	
大会参加費収入	398,000	324,500	73,500	
懇親会費収入	140,000	0	140,000	
食料費収入	40,000	0	40,000	
その他事業収入	0	0	0	
補助金等収入	0	0	0	
負担金収入	0	0	0	
寄付金収入	0	0	0	
寄付金収入	0	0	0	
雑収入	0	0	0	
受取利息収入	0	0	0	
雑収入	0	0	0	
事業活動収入計	5,128,600	4,845,100	283,500	
2. 事業活動支出				
事業費支出	6,425,000	5,911,500	513,500	
給料手当支出	1,400,000	1,200,000	200,000	
臨時雇賃金支出	200,000	96,000	104,000	
法定福利厚生費支出	5,000	5,000	0	
旅費交通費支出	600,000	680,000	△ 80,000	
通信運搬費支出	480,000	500,000	△ 20,000	
消耗什器備品費支出	0	0	0	
消耗品費支出	30,000	30,000	0	
賃借料支出	820,000	820,000	0	
印刷製本費支出	430,000	460,000	△ 30,000	
諸謝金支出	320,000	265,000	55,000	
租税公課支出	10,000	10,000	0	
負担金支出	202,000	202,000	0	
会議費支出	20,000	20,000	0	
広報普及費支出	410,000	430,000	△ 20,000	
田邊尚雄賞関連費支出	130,000	130,000	0	
会場運営費支出	200,000	50,000	150,000	
機関誌作成費支出	800,000	800,000	0	
例会運営費支出	100,000	100,000	0	
懇親会費支出	160,000	0	160,000	
保険料支出	0	0	0	
事務委託費支出	0	0	0	
食料費支出(雑支出①)	50,000	60,000	△ 10,000	
慶弔費支出(雑支出②)	20,000	20,000	0	
手数料支出(雑支出③)	20,000	20,000	0	
雑支出(雑支出④)	18,000	13,500	4,500	
管理費支出	530,000	530,000	0	
事務委託費支出	530,000	530,000	0	
事業活動支出計	6,955,000	6,441,500	513,500	

一般社団法人東洋音楽学会

(単位：円)

科 目	予 算 額	前年度予算額	増 減	備 考
法人税等の支払額	0	0	0	
事業活動収支差額	△ 1,826,400	△ 1,596,400	△ 230,000	
II 投資活動収支の部				
1. 投資活動収入				
基本財産取崩収入	0	0	0	
特定基金取崩収入	1,930,000	1,600,000	330,000	
田邊尚雄賞基金取崩収入	130,000	130,000	0	
研究推進事業基金取崩収入	1,800,000	1,470,000	330,000	
固定資産売却収入	0	0	0	
投資有価証券売却収入	0	0	0	
敷金・保証金戻収入	0	0	0	
投資活動収入計	1,930,000	1,600,000	330,000	
2. 投資活動支出				
基本財産取得支出	0	0	0	
特定資産取得支出	0	0	0	
100周年事業積立支出	100,000	0	100,000	
固定資産取得支出	0	0	0	
投資有価証券取得支出	0	0	0	
敷金・保証金支出	0	0	0	
投資活動支出計	100,000	0	100,000	
投資活動収支差額	1,830,000	1,600,000	230,000	
III 財務活動収支の部				
1. 財務活動収入				
借入金収入	0	0	0	
基金受入収入	0	0	0	
財務活動収入計	0	0	0	
2. 財務活動支出				
借入金返済支出	0	0	0	
基金返還支出	0	0	0	
財務活動支出計	0	0	0	
財務活動収支差額	0	0	0	
IV 予備費支出				
予備費支出	△ 3,600	△ 3,600	0	
当期収支差額	0	0	0	
前期繰越収支差額	0	0	0	
次期繰越収支差額	0	0	0	

時代や社会とともに移り変わる西洋音楽の世界と
洋楽導入以降の日本の西洋音楽の歩みを
7つの視点で全200項目にわたって詳しく解説

久保田慶一 編著

執筆：上野大輔、小山文加、黒川照美

増補改訂版では、現行本では十分な記述がなかったアメリカ音楽史を大幅に加筆し、さらに2019年末頃からはじまったコロナ・パンデミックなど、近年の世界の状況についての説明も追加しました。

●音楽史を立体的に描き出す7つの視点

時代と社会／音楽史の流れ／トピック／コラム／聴いておきたい
名曲／知っておきたい音楽用語／まとめと今後の勉強のために

ほか、絵画や写真も280点掲載!

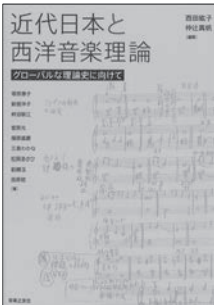


定価：990円(本体900円+税10%)
B5判／216ページ(カラー口絵4ページ)
ISBN978-4-86779-067-0



株式会社 教育芸術社

〒171-0051 東京都豊島区長崎 1-12-14
TEL.03(3957)1177 / FAX.03(3957)9223
URL <https://www.kyogei.co.jp/>



定価2970円
A5・192頁
ISBN978-4-276-10104-3

近代日本と西洋音楽理論

グローバルな理論史に向けて
西田紘子、仲辻真帆 編著

西洋の音楽理論は、我が国でどのように導入され、いかなるかたちで展開、変化してきたのか。複数の地域を対象として、領域横断的にこのテーマにせまる。



定価 6600円
A5・436頁
ISBN978-4-276-11023-6

音楽でつながる

日本とアジア・都市と周縁・近世と近現代
塚原康子先生東京藝術大学退任記念論文集編集委員会 編

塚原康子教授と、同大学院音楽研究科の日本音楽史研究室において塚原康子先生の下に学び、藝大やその他の大学院で博士号を取得した卒業生を中心に執筆した、研究論文集。

〈音楽指導ブック〉

アクティブに楽しく学ぶ世界の音楽

組み合わせで使える教材ユニット集

田中多佳子 編著 / 大田美郁、加藤富美子、権藤敦子、本多佐保美 著

定価2860円 / B5・160頁 ISBN978-4-276-32178-6

〈オルフェライブラリー〉 小島美子・藤井昭昭記念日本民俗音楽学会賞受賞

民謡とは何か? 島添貴美子 著

定価2750円 / 四六・224頁 ISBN978-4-276-37114-9

〈オルフェライブラリー〉

声の世界を旅する 増野亜子 著

定価2750円 / 四六・232頁 ISBN978-4-276-37109-5

〈オルフェライブラリー〉

新版 雅楽入門 増本伎共子 著

定価2640円 / 四六・264頁 ISBN978-4-276-37104-0

日本音楽基本用語辞典

音楽之友社 編

定価1980円 / A5・192頁 ISBN978-4-276-00182-4

唱歌で学ぶ日本音楽 (DVD付き)

日本音楽の教育と研究をつなぐ会 編著 / 徳丸吉彦 監修

定価3630円 / B5・128頁+DVD2枚 ISBN978-4-276-32170-0

よくわかる日本音楽基礎講座

〜雅楽から民謡まで 増補・改訂版 福井昭史 著

定価2640円 / B5・160頁 ISBN978-4-276-32168-7



音楽之友社

〒162-8716 東京都新宿区神楽坂6-30
<https://www.ongakunotomo.co.jp/>

TEL: 03-3235-2151
FAX: 03-3235-2148

※定価 (本体価格+税10%)

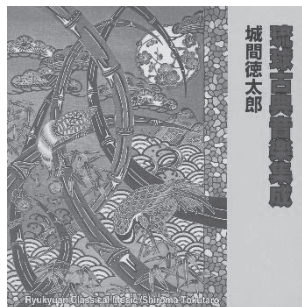
※重版により、定価が変わる場合がございます。予め、ご了承ください。

主要音楽配信サービス(ストリーミング・ダウンロード)にて好評配信中

正調郡上おどり

郡上踊保存会

かわさき/春駒/猫の子
やっちく/三百/古調かわさき
げんげんばらばら/まつさか



琉球古典音楽集成

唄・三線:城間徳太郎

かぎやで風節/恩納節/長伊平屋節/中城はんだ前節/特牛節/揚作田節/東里節/赤田花風節/黒島節/そんばれ節/夜雨節/浮島節/本田名節他

醍醐寺の声明

真言宗醍醐派総本山

醍醐寺醍醐山青年連合会

仁王会前行法要(四智梵語/大日讃/不動讃/廻向/発願他)
恵印法要(前讃/理智不二界會礼讃/九条錫杖/般若心経他)



現地録音による

中国少数民族音楽紀行

(総集編)

トン族の女声合唱/ハニ族の口琴/ブーラン族の男女の掛け合い歌/モンゴル族の馬頭琴/ウイグル族のナヴァイー・ガザル歌唱アンサンブル/ヌー族の讚美歌ほか全10曲



じゃぼオンラインストア
— 伝統を未来に —
<https://japo.murket.jp>

当財団では日本の伝統音楽・伝統芸能ジャンルに特化したオンライン専門店〈じゃぼオンラインストア〉を開設。多様な音楽種目を有する伝統邦楽と列島各地の民俗芸能を幅広くダウンロード販売中。

公益財団法人 日本伝統文化振興財団
JAPAN TRADITIONAL CULTURES FOUNDATION